
食事

スケープゴート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

食事

【Nコード】

N6460M

【作者名】

スケープゴート

【あらすじ】

美しい男の食事について

「美しいものはなにかだって？　そんなの、僕に決まってるじゃないか」

目の前の男は表情を変えずに言い切った。アンティーク調の繊細な細工を施された飴色のテーブルを境に向かい合った彼は、絹よりも滑らかなように清水の水面の光の反射よりも輝く黒髪を手で弄んでいる。

鏡面のようにつるりとしているテーブルに肘をついて、私は目の前の男を観察してみる。

髪の色艶はさっき言った通り。肌は真珠のように輝く白さ。あまり良い表現ではないかもしれないけれど絹ごしの豆腐のように滑らかで柔らかだ。三日月の弧を描く長いまつげの下。伏せると影が落ちて憂いを帯びる瞳は微かに蒼みを帯びているようだが、濡れるような闇の色。薄い唇は桜色。ぼうつと遠くに想いを馳せるようにして開けられた唇の隙間から覗く下は薔薇の色、飾られる歯は真珠の煌めき。彼の姿形を創る部品のすべては華奢で美しく清い。テーブルを突いてリズムをとる指の先についている爪でさえ美しい。

高い天井から降り注ぐ光。シャンデリアのような凝った照明に照らされた目の前の彼の顔は淡い陰影を刻んで、神や天使のような凄烈で神々しい美しさに満ちていた。

そんな彼に聞いたさっきの問い。

「美しいものはなにか」

だなんて、彼にとっても私にとっても答えは決まりきった愚問だった。

落ち着かないように、動かしていた指の律動をやめて再度髪をいじり始めた彼。

白魚のように滑らかに白い彼の手で梳かれていく黒髪を眺めながら、私は今更ながらに美しい彼の気難しい性格を思った。

そう、彼は高飛車で生意気でわがままだ。その上、自分の周りの人間に求める理想が高い。

何代もの当主、何世紀もの時間を積み上げて築かれた彼の地位。

彼の有する財産は莫大なもの。彼の座る地位も高い。彼の美貌は神と錯覚するほど。

そんな彼の周りにはいつも人が絶えなかった。

男も女も、大人も子供も、暗くドロドロとした人間の汚い欲を潜ませて表面に清くて友好的な仮面を取り繕ってやってくる。彼が持っている眩しいものを取ろうと手を伸ばしてよだれを垂らしながらやってくる。

けれど彼は聡かった。そして鋭く、清かった。

自分の周りに寄ってきた醜い顔を隠した人間を、彼自身の力で一蹴させたのだ。

そしてまっさらになった彼の周囲。

その真ん中に立って、彼は一人の孤独を抱え一人の気楽さと自由を使って自分で自分の隣に立つべき人間を探し始めたのだ。

彼は高慢でわがままで、けれど聡くて鋭くて清い。

そして現在、私は彼のテーブルの向かいの席についている。別に私が彼の隣にふさわしいとは思っていない。

むしろ彼の隣に立つにはまだまだ力不足だ。彼の足元に跪くことすら許されないのではないだろうか、と日々思い悩むほどだ。

けれど彼は自分の足で自分の周囲にいるにふさわしいものを探した果てに私を見つけ出した。

白亜の壁にもたれかかっていた私。

初夏の生気に満ちた風に黒髪をなびかせて近づいてきた彼を一瞥して目を合わせた私。

ほほ笑んで僕の名前を知っているかい？ と聞いてきた彼に、知っ

てるけどあなたのことは知らないわと答えた私。

それから彼は私を自分のそばにいることを許したのだ。

目の前に座る彼はあのころから変わらずに美しい。

私は始めて彼の姿を見たとき、彼の背から差した日差し of 眩しさに目を細め、膝について目線を合わせてきた彼の芸術のように整った顔を見て神様か、と呟いたんだ。

あのころから変わらないのは彼だけなのかもしれない。

私は彼を真似て短かった髪を伸ばし始めた。

おっかなびっくり、床を口で踏むこともためらい、椅子に浅く腰かけて、テーブルの上に手を置くことすら恐ろしいと思っていた私は、今は当たり前のように肘を突いて彼の顔を無遠慮に眺めている。テーブルの滑らかな表面を手で撫でた。

「どうかしたのかい」

穏やかなアルトの声が静かな空気を揺らして問いかけてきた。

微かに青い黒眼が私の瞳を射るようにまっすぐと見つめる。

両肘を突いて手を組み合わせ、その上に顎を乗せて同じように私も彼を見た。

「どうしてあなたは私を選んだのかなって考えていたの」

僅かに唇をあげて答えると、彼は緩やかに目元を和ませて口を開いた。

「そんなの考えるまでもない。直感さ。本当に大切なものは時間をかけて育てるのではなくて、目に入れた瞬間に大切なものになるんだって僕は思ってるからね」

「一瞬で」

「そう、一瞬で。一目惚れっていうものだよ。僕はあの日、君に一目惚れしたんだ」

彼のほほ笑みは穏やかだ。善と慈しみを含めた優しく美しいほほ笑み。

その表情を浮かべた彼を見て、眉をあげて目を開いて呆然としてい

る顔の頬に熱が宿った。
急いでそっぽを向く私。

どくどくと鼓動が喉の方にまでせりあがってくるような奇妙な感覚に喉元と左胸を抑えた。

椅子に横座りする格好になった私の視界には大理石の白く固い床しか見えない。

震えそうになる喉を必死に落ち着かせながら大きく息を吸って、吐いた。

目を閉じて、開けて、鼓動が元の位置に下がりつつあるのを認めて元の体制に戻って彼を正面に見据えた。

本当は純粹で誰よりも無垢で、それでいて夜の風のように鋭い彼の瞳を見た、とき、テーブルと同じくアンティーク調の細工の立派な扉をノックする音が聞こえた。

「お食事を、お持ちいたしました」

「どうぞ」

「失礼いたします」

音もなく開いた扉から執事とメイドがやってきて、銀のワゴンを押して入ってきた。

それぞれ目の前の飴色のテーブルの上に、食事の用意をして彼らは執事二人を残して同じ扉から出ていった。

拍子抜けして脱力した私の目の前の彼はテーブルに並べられた美しいスイーツを前に目を輝かせた。

細やかな細工を施され、芸術の域に達しているテーブルの上の物たち。

私側のテーブルにも置かれた彼と同じメニューの数々。

嬉々としてフォークを握り、上品に口へ運び始めた彼を眺めて私はため息をついた。

微かにうなだれた私の鼻に甘い香りがすっと入り込んでくる。

私の後ろと彼の後ろに控えている執事を少しだけ気に掛けながら、彼に聞いた。

「ねえ、いつも思うんだけど、食事ってこれ？」

口に含んだモンブランの租借を終えて呑みこんだ彼は、輝かんばかりの、無邪気な子供のような笑顔を浮かべて言った。

「そうだよ。美しいものは美しいものしか食べなくていいんだから」

プリンにタルト、ケーキにムースにアイスにタルトにパイに……。

目の前を彩る様々のスイーツ。

美しいそれらを口に運ぶ彼は、神か天使のように美しい男だった。

(後書き)

とくになにか思うことがあって書いたものではありませんが、楽しんでかけました。

久々の更新……。

緊張します。

うまく書けてるかな？

ここまで読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6460m/>

食事

2010年10月20日19時05分発行